

サトウキビ刈り応援・交流会

「サトウキビ刈り応援・交流会」が実施されました。

沖縄県のサトウキビ農業は農家の高齢化も進み、手刈りによる収穫は大変な作業となっています。このような状況にかんがみ、少しでもお役に立とうと「農業農村を応援する大学生サークルネット」(加盟13大学、代表 中里良一)では、糸満市内のサトウキビ圃場においてサトウキビ刈りの作業を応援する「サトウキビ刈り応援・交流会」(協力:(一財)日本グラウンドワーク協会)を実施しました。

大学生サークルは、明治大学「楽農」4Hクラブ、新潟大学新大むらづくり応援隊、名城大学地域共創隊WITH、神戸大学地域おこしサークル水芭蕉、島根大学地域創生・結しまね、琉球大学おきなわ食・農研究会の6大学、35名の学生が参加しました。

まず、農家からサトウキビ農業の厳しい現状(後継者がいない、耕作放棄地が急増、サトウキビがなくなるなど)のお話がありました。学生のほとんどがサトウキビ刈り初体験でしたが、農家の指導を受けながら、①茎の根元を斧で切る、②切られた茎を一か所に運ぶの2つに分かれて作業を行いました。ハブに用心とういうお話もありました。体力がある大学生によりスピーディーに作業が進みました。

作業後、農家から感謝の言葉が述べられました。学生からは、「今回の活動が、少しは農家さんの応援になればうれしい」、「なかなかできない貴重な体験ができた」、「今後も農家さんと交流を続けたい」、「他大学の学生と一緒に作業ができて楽しかった」などの感想が述べられました。

夜は交流会を実施しました。各大学のサークル活動の状況、講義や大学生活の様子、就職活動、趣味などさまざまな話題で交流が進みました。未成年はノンアルコールで盛り上がっていました。参加者同士でLine友達になりました。「農業農村を応援する大学生サークルネット」では、来年以降もこの取り組みを続けたいと考えていますが、沖縄までの旅費が学生の自己負担なので、この活動を続けるために、学生への補助など何か良い方法がないか思案しているところです。



「まちは都会・田舎では語れない」

山口拳生 名城大学 都市情報学部 1年

みなさんが思い浮かべる日本における「都会」「田舎」とはどのような場所でしょうか。私がある日、東京で行われた講演会に参加した際、日本全国から集まった人と話す機会がありました。そこで衝撃を受けたことがあります。それは、私の地元の話をした際に東京で生まれ育った人には「田舎なんだね」と言われ、長野県の山奥で生まれ育った方には「都会じゃん」と言われたことです。同じまちが、人によってまったく異なる場所に映る。この体験から私は人によって都会と田舎の定義が全く異なるのだと気づきました。

辞書で調べると「都会」は家屋や人口が集中し、産業・文化の中心となっている、にぎやかな都市と、「田舎」は都会から離れた土地とありました。この定義からも明確な基準がないことは明らかです。一般的に都会は高層ビルが立ち並び、長編成の電車が数分間隔で到着し、まちが人で溢れかえっている様子、田舎は田畑が広がりぼつぼつと一軒家が立ち並び、人はまばらな様子を思い浮かべる人が多いのではないのでしょうか。

今述べたようなものが極端な例であると思いますが、その基準というものは人や比較対象で変わってくるのだと思います。私の住む三重県桑名市は人口約14万人、名古屋から約30分程度に立地する名古屋のベッドタウンです。そのため、中心地である桑名駅周辺にはビルが立ち並び都会的な一面もありますが、車で10分も移動すると閑静な住宅街、田畑が広がる田舎的な場所もあります。また交通面では市内のバスやローカル線は30分～1時間に1本程度の場所が多く、車なしでは少し生活が難しい場面もあると感じます。個人的に桑名市は都会と田舎の両方が混ざり合う「トカイナカ」だと思っています。このような絶妙なまちだからこそ先ほど述べたような両方の意見が出やすい状況になっていると考えます。

とはいえ、地方中核都市の周辺には「トカイナカ」なまちがたくさんあります。それを都会の人が田舎と決めつけることはおかしいことなのではないのかと考えます。まちを見る際に都会、田舎という二項対立で語ること自体に無理があり、このような判断基準は生まれ育ったまちの環境に大きく引っ張られており、偏見での一方的なラベリングにすぎないと考えます。

だからこそ、本文を読んでくださった方には「まち」を都会、田舎という曖昧な定義でラベリングするのではなくそのまちの特徴を理解しようとする、つまりまちをまちとして見て欲しいです。それは、まちは画一的なラベルでは語ることはできないほど個性豊かであり魅力もたくさんあるからです。田舎だと思っても一概に田舎と決めつけるのではなくそのまちの魅力を探してみてください。都会だと思っても一概に都会と決めつけるのではなく、その都市の特徴や成り立ちを調べてみてください。全く同じ成り立ちのまちは存在しません。

そうすることで、都会・田舎という画一的な判断だけでは決して見えてこなかったまちの魅力に気づくことができるはずです。私はこのような一方的なラベリングをする人が一人でも減り、それぞれのまちが持つ個性や魅力が正当に評価される社会になってほしいと願っています。みなさんのまちに対する想いを、一度見つめなおしてみてください。

行こうよ！水土里の旅！

□ 権座(ごんざ) (滋賀県近江八幡市)

1. 舟でしか行けない「湖上の田んぼ」

「権座」は、琵琶湖の内湖である「西の湖(にしのか)」に浮かぶ、島のような飛び地の田んぼです。唯一の交通手段：周囲を水に囲まれているため、農家の方は今でも**「田舟(たぶね)」**に乗って湖を渡り、農作業に通っています。

かつてはこの地域に島状の田んぼが点在していましたが、干拓が進む中で、地理的に困難だった「権座」だけが唯一、湖の中の田んぼとして残りました。

2. 栽培のこだわり

権座で栽培されているのは、明治時代に滋賀県で誕生した酒米「滋賀渡船(わたぶね)6号」です。背丈が高く倒れやすいため、一時は栽培が途絶えて「幻の米」と呼ばれていましたが、近年の地産地消の動きの中で権座を中心に復活を遂げました。

無農薬・減農薬栽培：琵琶湖の環境を守るため、環境こだわり農業(無農薬や減農薬)が徹底されており、非常に手間暇をかけて育てられています。独特の土壌：湖に囲まれた湿地帯特有の肥沃な土壌が、米に力強い旨味を与えます。

2. 国の重要文化的景観

「舟で通う農業」という貴重な原風景は、国の重要文化的景観の第1号(近江八幡の水郷)の一部として選定されています。滋賀県の農業遺産を語る上で欠かせない場所です。

また、現在は「権座・水郷を守り育てる会」などの地元グループによって、稲刈り体験やグリーンツーリズムの拠点としても活用されており、伝統的な景観を守る取り組みが続けられています。

舟でしか渡れない権左はちょっとした冒険の気分も味わえます。興味があれば権座・水郷を守り育てる会にアクセスしてみてください！



八幡堀

安土桃山時代に豊臣秀次が築いた運河で、白壁の土蔵や石垣が続く景観は時代劇のロケ地としても有名です。「屋形船」での堀めぐりも人気です。



幻の地酒「権座(ごんざ)」

権左の特別な田んぼで収穫された「滋賀渡船(わたぶね)6号」を使って造られる日本酒です。

生産量が少なく非常に希少な地酒です。豊かな香りと力強い米の旨味が特徴の純米吟醸酒です。

農業土木技術—プロの仕事

農業土木に関連する企業・団体が日々の業務で取り組んでいる技術情報を紹介する「農業土木技術—プロの仕事」。今回は、農業従事者の減少、高齢化を前提とした社会において必須となる効率化の前提「圃場整備」についてご紹介します。

圃場整備とは？ ～効率的で強い農業の基盤づくり～

かつての日本の農地は、左側のように一つひとつの区画が小さく、形もバラバラでした。これは手作業が中心だった時代の名残ですが、現代の大型機械を使う農業においては、作業効率を妨げる要因となっていました。そこで行われるのが圃場整備です。右側の図面のように、農地を規則正しい大区画へと作り替えます。これにより、1台の機械で広範囲を短時間で作業できるようになり、農家の負担を大きく軽減できます。



整備前:細かくて、形もバラバラ。
昔ながらの風景だけど、作業は大変…

整備後:大きくて、きれいに整った形に！
大きな機械も使いやすい！

圃場整備のメリット

- ▶ 生産性の向上(作業の効率化)農地を大区画化することで、大型機械による農作業を可能にし、労働時間を大幅に短縮します。
- ▶ 適切な水管理と品質の安定
- ▶ 用水路や排水路をセットで整備し、天候に左右されにくい安定した栽培環境を整えます。
- ▶ 農地の多目的利用水はけを改良することで、米だけでなく麦や大豆など、他の作物の栽培(汎用化)もしやすくなります。
- ▶ 地域農業の維持と発展管理の負担を減らすことで、次世代の担い手への農地集約や、新規就農の促進につなげます。

建設コンサルタントとしてのチャレンジ

このように、日本の将来にとって必須であり、多大なメリットのある圃場整備ですが、農業土木の建設コンサルタントとしては、

- ▶ 農業土木のあらゆる要素が詰まった幅広い検討の視点
- ▶ 地元の方の説明や換地、各行政機関との多方面・長期にわたる合意形成

など、シンプルそうに見えて大変にチャレンジングな業務領域でもあります。



地元の方々に説明をしている様子

しかしながら、圃場整備は日本の食糧安全保障を確保するためにはとても重要であることは間違いありません、これからもしっかりと取り組んでいきたいと思っております！

サークル活動紹介

「東京大学 サークル活動紹介」

私たちは「農業×地域おこしでむらの未来を変える」をコンセプトに、千葉県富津市や福島県飯舘村、北海道栗山町などで活動している学生団体です。今回は、私たちの活動拠点の一つである千葉県富津市での取り組みや、東京での発信活動の一部をご紹介します。

🌱 畑での農作業と新たな挑戦

私たちは地元の農家の方々に温かいご協力をいただきながら、一年を通してさまざまな作物を栽培しています。季節の野菜（大根や白菜、ほうれん草など）の栽培に加え、最近では新たな挑戦として「そば」の栽培にも取り組みました。

自然を相手にする農作業では、害虫対策や収穫量の確保など思い通りにいかない難しさにも直面しますが、自分たちの手で試行錯誤しながら作物を育てる過程で、多くの経験を得ています。これから暖かくなるにつれて、また新しい作物が成長していく様子を見るのが楽しみです。



🍷 寺子屋を通じた地域交流

農作業と並ぶもう一つの柱が、地域の方々との交流です。富津市にある近くのお寺では、子供たちが自習や交流を行う「寺子屋」が普段から開催されており、私たちも訪問の際にお手伝いをさせていただいています。

活動内容は学習支援がメインですが、勉強を教えるだけでなく、子供たちとたくさんお話をしながら楽しく交流しています。普段から地域に入り込み、こうした時間を共有させていただくことで、子供たちや地域の方々との距離がぐっと縮まるのを感じる大切なひとときです。



🏠 東京・六本木でのマルシェ出店を通じた地域PR

私たちが育てた作物は、収穫して終わりではありません。東京・六本木で開催される「ヒルズマルシェ」などのイベントに出店し、都市部の方々へ直接お届けする活動も行っています。マルシェの店頭には、私たちが手塩にかけて栽培したお米から作った「米粉」や、小麦を使った手作りのお菓子などが並びます。単に商品を販売するだけでなく、お世話になっている地域の魅力や、農業の楽しさを直接お話してPRすることも大切な目的です。お客様からの「美味しい」「活動頑張ってるね」という声は、私たちの大きなモチベーションになっています。



🌱 これからのむら塾

昨年、むら塾は設立から10周年という大きな節目を迎えました。今年は次の10年に向けた新たなスタートの年です。先輩方が地域で築き上げてきた関係性を大切にしつつ、農作業や地域交流、そして都市部でのPR活動を通じて、自分たちにできることややりたいことに全力で取り組んでいきたいと考えています。

農業農村を応援する大学生サークル」の活動状況(Instagram)

☐日本グラウンドワーク協会公式公式Instagramにアップしています。
<https://www.instagram.com/groundworkassociationjp/>

[発行・お問合せ先等] 一般財団法人日本グラウンドワーク協会 中里

Tel:03-6459-0324 Mail: nakazato@groundwork.or.jp

グラウンドワークとは「協働で地域をよりよくする」という意味です。当協会は、「中間支援団体」として①地域活性化、②環境保全、③福祉、④棚田保全等社会的課題解決を目的に、若者（大学生等）参加及び男女共同参画による協働を主軸にした、いわゆる「日本型グラウンドワーク」を推進しています。